

自主的なキャリアアップの場としての勉強会： 大学図書館員による勉強会 ku-librarians の軌跡

呑海沙織，赤澤久弥，大西賢人，野間口真裕

Study meetings as places to voluntarily improve career opportunities: a history of "ku-librarians" by and for librarians at colleges and universities, by DONKAI Saori, AKAZAWA Hisaya, ONISHI Masato and NOMAGUCHI Masahiro.

1. はじめに

近年，図書館をとりまく環境は大きく変化し，図書館の役割や図書館自体も変容しつつある。図書館員に求められる知識やスキルも日々変化するなかで，図書館員それぞれが継続的に知識やスキルを身につける必要性がますます高くなってきている。

図書館員に限らず職業人がキャリアアップ¹⁾する方法としては，(1)実際の業務を通じた研修・訓練(OJT: On the Job Training)，(2)日常の業務から離れて行われる研修・訓練(Off-JT: Off the Job Training)，(3)個人が自発的に学習する自己啓発，の3つが考えられる²⁾。OJTやOff-JTが組織的に提供されるものであるのに対し，自己啓発は個人が能動的に取り組むものである。

本稿では，キャリアアップの方法としての自己啓発に着目し，図書館関係の勉強会であるku-librariansをとりあげ，主として図書館員の自主的な学びという観点からその軌跡をふりかえる。ku-librarians³⁾の活動を(1)立ち上げ期(1999年9月～2005年3月)，(2)安定期(2005年4月～2008年3月)，(3)現在とこれから(2008年4月～現在)，の三部に分け，それぞれの時期の幹事，つまり，「立ち上げ期」は呑海，「安定期」は赤澤，「現在とこれから」は大西・野間口が，それぞれ中心となって執筆する。

2. ku-librarians とは

本章では，勉強会としての ku-librarians の概要

と特徴を述べる。

2.1 勉強会としての ku-librarians

ku-librarians は，立ち上げから12年目を迎える大学図書館関係の勉強会である。1999年に京都大学の図書系職員が立ち上げ，現在，関西の大学図書館関係者を中心に活動を行っている。

しかし実際のところ，ku-librarians は正式名称ではない。立ち上げ当時から幾度となく会の名称を決めようと試みたが定まらず，現在に至っている。ku-librarians はこの勉強会のメーリングリストの名称であるが，会そのものを指して使われることもあるため本稿では，会の名称として ku-librarians を使用することとする⁴⁾。

勉強会は基本的に月1回，業務時間外に開催される。勉強会への参加は自由であり，京都大学の職員に限られるものではなく，図書系職員に限られるものでもない。また，勉強会開催の日や曜日は特に定められていない。勉強会が開催される日時や場所・内容は，主としてメーリングリストで報知される。

勉強会のスタイルも特に定められていないが，基本的なスタイルは，特定のテーマについて講師が話し質疑応答を通じてそのテーマに関する理解を深めるというものである。講師は勉強会のメンバー⁵⁾である場合もあるし，メンバー以外の場合もある。また，テーマは必ずしも幹事が設定するものではなく，メンバーが自由に提案し，持ち込むことができる。

2.2 ku-librarians の特徴

勉強会としての ku-librarians にはどんな特徴があるのだろうか。ここでは，ku-librarians の特徴として，「ゆるやかさ」「コミュニケーション重視」に焦点をあて，それぞれについて述べたい。

どんかい さおり 筑波大学図書館情報メディア系
あかざわ ひさや 京都大学附属図書館
おおにし まさと 京都大学文学研究科図書館
のまぐち まさひろ 京都大学経済学研究科図書室

(1) ゆるやかな集まりであること

ku-librarians の特徴としては第一に、ゆるやかな集まりであるということをあげることができる。この「ゆるやかさ」にはふたつの側面がある。

ひとつは組織そのもののゆるやかさである。ku-librarians には確固たる設置母体があるわけでもないし、明文化された運営方針やルールがあるわけでもない。ただ、ku-librarians という名のもとに、参加したい人が参加したいときに参加する勉強会である。基本的に会費を徴収することもないし、名簿もない。

もうひとつは参加するにあたってのゆるやかさである。興味があれば、所属機関等にかかわらず参加可能であるし、逆に参加の義務もノルマもない。ただメーリングリストに登録して勉強会開催の情報を得、参加するかどうかを自身で判断するだけである。

勉強会の正式名称が定まらないまま現在にいたっているのも、このゆるやかさを体現しているといえるかもしれない。

(2) コミュニケーション重視であること

ku-librarians は立ち上げ当初より、コミュニケーションを重視している。早くからメーリングリストを立ち上げ、対面以外のコミュニケーションの場を設けたこともその一例である。また、勉強会の後には必ず懇親会を設けており、懇親会からの参加も歓迎される。懇親会をはかるといった本来の意味ももちろんあるが、「勉強会」には興味を持たないけれどもコミュニケーションの必要を感じるといった人にも間口を広げることを目的としている。

ku-librarians はそもそもインフォーマルな集まりである。しかし、勉強会そのものは定型がないものの「勉強会」という形式をとっているという意味でフォーマルな側面も持つ。一方、懇親会は純粋にインフォーマルな集まりである。よって懇親会は、インフォーマルな場でのみ流通する情報の交換場所ともなっている。また、飲食しながらリラックスして話すことで、偶発的な気付きを得たり、気負いのない人間関係を築いたりすることができる。

このように、フォーマルな側面をもつ勉強会そのものと、純粋にインフォーマルな懇親会という二つのステージを意識的にもつことによって、より円滑なコミュニケーションをはかっている。

3. ku-librarians の立ち上げ

本章では、ku-librarians 立ち上げのきっかけや背景、1999年9月から2005年3月までの立ち上げ期の活動について述べる。

3.1 勉強会立ち上げの背景

京都大学には50以上の図書館・室があり、ワンパーソン・ライブラリや少人数の職員によって運営されている図書館・室も少なくない。ku-librarians 立ち上げ当時においてもこの状況は変わらず、図書館・室によって閲覧規則や分類体系が異なることも珍しくなかった。

小規模図書館内では組織的な OJT もままならない。また、図書館に関する研修も目録システムなど特定のものに限定されており⁶⁾、学内の他の図書館・室の図書系職員と交流する機会もほとんどなかった。メールや Web も普及していない時期であり、コミュニケーションをとる手段も限られていた。

一方で、図書館を取り巻く環境が大きく変動した時期でもあった。京都大学に関しては、1995年より附属図書館で新入生オリエンテーションが開始され⁷⁾、1995年には工学部電気系図書室が、翌1996年には附属図書館がホームページを立ち上げた。さらに1998年には電子図書館システムの運用が開始され、「情報探索入門」が開講された⁸⁾。「情報探索入門」は、附属図書館が提供部局となり、図書系職員が演習補助としてかわる全学共通科目である。大学図書館における情報リテラシー教育の先駆けとして注目を集めた。また、ワーキンググループという形で、部局の壁を越えた協力体制が採用されたことも特筆に値する。

3.2 勉強会立ち上げのきっかけと準備

このように、新しいサービスや技術、考え方が導入されるなかで、知識やスキルの習得や情報交換の必要性が高まっていった。このような中、竹村心氏（当時、京都大学教育学部図書室）より、大学図書館問題研究会の京都大学班の復活を助言された。大学図書館問題研究会とは大学図書館員を中心とする自主的・実践的な研究団体である⁹⁾。この下部組織としてかつて京都大学班という研究グループが存在したが、若手を中心となってこれを再開してはどうかというものであった。そこで、鈴木敬二氏(当時、

京都大学附属図書館)と大綱浩一氏(当時、京都大学附属図書館。現在、国立民族学博物館図書館)に、この案についての意見を求めた。その結果、京都大学班という形では勉強会への参加者が限定的になってしまうので、他の形を考えた方がいいのではという結論に達した。

一方、当時の同僚であった天野絵里子氏(当時、京都大学工学部電気系図書室。現在、九州大学附属図書館)から、若手図書系職員の交流会開催の提案があった。そこで、天野氏から呑海までの世代のほぼ全ての京都大学図書系職員に声をかけ、1999年9月6日に、交流会を行うこととなった。この交流会で、勉強会の立ち上げを提案してみたところ、賛同する声が多かったため、勉強会を立ち上げるようになった。これが、ku-librariansの「プレ勉強会」となる。

早速、どのような勉強会にするのかについて話し合ったところ、「まずは講義形式で図書館一般について勉強がしたい」「日常業務に即した問題解決型の勉強がしたい」などの意見がだされた。また、勉強会の名称についても話し合われた。「大学図書館研究会」などの名称が候補としてあげられたが、実務と研究の乖離という問題意識から「研究会」という表現に違和感をおぼえるという意見もあり、あえて勉強会の名称は決定しないこととした。

3.3 立ち上げ時の方針

幹事としてはとりあえず、自身のポリシーでもある「継続すること」を第一目標に掲げ、あえて、参加者がひとりもいなくなったらやめようという軽い気持ちで進めていくこととした。しかし、これまでこのような勉強会に携わった経験がなく、全くの手探り状態であったため、過去に存在した勉強会について情報を集めた。「継続されなくなった理由」を知るためである。その結果、いつのまにか「立ち消え」になってしまったというケースが多く、「立ち消え」には共通する理由があることがわかった。

ひとつは、幹事に関するものである。幹事を持ち回りで担当するとこととした場合、忙しい人や幹事をすることに慣れていない人が担当になると、そこで立ち消えになってしまう。反対に、幹事を特定の個人が担当することとした場合、その個人が異動など何らかの理由で幹事ができなくなると、立ち消えになってしまう。また、その幹事の「色」を濃く前

面に押し出すと私塾化することになり、参加者に広がりをもてなくなるという話もあった。もうひとつは、ノルマに関するものである。例えば年に数回は勉強会で発表するなど、参加者にノルマを課すことにした場合、そのノルマをこなせない参加者が脱落していつてしまい、結果として参加者が少なくなり立ち消えになるというものである。これらの前例をふまえ、(1)幹事は持ち回り担当としない、(2)幹事はリーダーシップを発揮するのではなく、世話役に徹する、(3)参加者にノルマを課さない、という運営上の方針をたてた。

また、勉強会の目的を、①コミュニケーション、②情報交換、③スキルアップとした。最優先は、コミュニケーションである。

3.4 初期の勉強会

下記に、第1回から第15回までの勉強会の発表者と所属、発表タイトルをあげる。記録の残っているものについては、参加人数を付した。

第1回：1999年9月27日(月) [17名]

鈴木敬二氏(京都大学附属図書館)

「オランダと英国における電子図書館」

第2回：1999年11月5日(金)

江上敏哲氏(京都大学工学部材料工学専攻図書室)「工学部文献収集講座の報告」

大綱浩一氏(京都大学附属図書館)

「新着図書リスト作成プログラムについて」

第3回：1999年11月30日(火)

Mr. Richard Roman (British Library)

“The Electronic Library”

第4回：1999年12月10日(金)

宇陀則彦氏(図書館情報大学)

「図書館情報大学における教育」

田中岳文氏(九州龍谷短期大学)

「短期大学での図書館学教育」

第5回：2000年1月27日(木) [11名]

「図書館の仕事って本当に楽なの？」

(ディスカッション)

第6回：2000年2月19日(土) [20名]

「内と外から見た図書館」

図書館情報学研究会との合同勉強会

第7回：2000年3月23日(木) [11名]

天野絵里子氏(京都大学工学研究科・工学部電気系図書室)「京都大学に新しい図書館を創る」

第8回：2000年4月27日(木)

後藤慶太氏(京都大学附属図書館)

「あめりか日記：図書館の話もあるかもしれないよ、よううがあれば」

第9回：2000年5月25日(木)

「プレゼンテーションを考える」

同じテーマで3名が発表し、プレゼンテーションについて考えるという企画

第10回：2000年6月22日(木) [20名]

南浦邦仁氏(ジュンク堂京都店長)

「図書館人と書店人」

第11回：2000年7月27日(木) [14名]

岡本公一氏(大阪屋図書館部長)

「取次会社の出版流通システム」

第12回：2000年9月28日(木) [21名]

小島浩之氏(京都大学附属図書館)

「古籍の魅力：中国資料を中心として」

第13回：2000年10月26日(木)

呑海沙織(京都大学附属図書館)「英国における高等教育機関の情報共有システム」

第14回：2000年11月15日(水) [13名]

Mr. Ross Macyntyre(MIMAS)

Dr. John Habershon(British Library)

Mr. Richard Roman(British Library)

「英国図書館におけるリモート・サービスの発展とMIMAS」

第15回：2000年12月14日(木) [18名]

マルラ俊江氏(UCLA)「アメリカにおける日本研究と日本語文献司書の仕事」

15回中、12回が講師による講演・発表を核とする勉強会であり、内5回は勉強会のメンバーが講師(発表者)を務めている。メンバー以外の講師については、大学教員の他、書店や取次会社、海外の図書館にも依頼した。いずれの講師も無償で貴重な時間を勉強会に割いてくださった。第5回はディスカッション形式の勉強会、第6回は図書館情報学会との合同勉強会、第9回はプレゼンテーションを考えることを目的に同じテーマで複数人が発表するといった企画ものである。

京都大学附属図書館では、2000年12月に電子図書館に関する国際会議が開催された。第14回にはこの国際会議に発表者として参加されていたMIMAS¹⁰⁾のマッキンタイヤー氏、英国図書館のハーバーション氏、ローマン氏に講師を依頼した。この回の勉強

会が、翌2001年11月の英国図書館ツアーにつながっ

ていく。これは、勉強会のメンバー8名でコーチを貸し切って、英国の大学図書館を訪問するという企画である。訪問先は、マンチェスター大学、リーズ大学、バース大学、セントパンクラス英国図書館新館、ボストン・スパの英国図書館文献提供センター(BLDSC: British Library Document Supply Centre)などである。ローマン氏のコーディネートが得られたこともあり、それぞれの訪問先で歓待を受け、詳しい説明を受けることができた。海外視察の機会がそれほどなかった当時において、単なる見学にとどまることなく英国の大学図書館事情を知る貴重な機会となったといえる。

3.5 安定期に向けて

このように回を重ねてku-librariansは安定期に入っていた。勉強会を軌道に乗せることができた要因としてさまざまなものをあげることができるが、ここでは「職場の理解」をあげておきたい。例えば、ku-librariansは初回より、京都大学附属図書館の一室を使わせていただいている。また、メーリングリストも立ち上げ期は、工学部電気系のサーバを使わせていただいていた。職場や上司の理解がなければ、このような環境は整わなかっただろう。

「何やら若手が定期的に訳の分からない集まりを行っている」と職場や上司から危険視されたこともあった。そのような場合は、丁寧に説明を重ねていき、理解を求めた。附属図書館の部課長が新たに赴任されるたびに勉強会の説明を行うとともに講師を依頼した。業務時間外の活動であるので職場の理解は不要であるという考え方もあろう。しかし、安定的に勉強会を運営し、また、勉強会での成果やアイデアを業務につなげていくためには、職場の理解は不可欠であると考えたからである。

2005年3月、京都大学外への出向を機に、勉強会で中心的な役割を果たすようになっていた3人に幹事を引き継ぐことにした。複数名に引き継いだのは、ひとりで幹事を担当することに限界を感じたからである。こうして、ku-librariansは安定期に入ることになる。

4. ku-librarians 安定期

2005年4月、当初からの幹事であった呑海から、赤澤、天野絵里子氏、江上敏哲氏(現在、国際日本

文化研究センター図書館)の3名が幹事を引き継ぐこととなった。もとより3名とも勉強会初期からのメンバーであった上、自ら発表したり企画を持ち込んだりするようになっており、運営にあたっての支障は少なかった。こうして勉強会は、複数幹事による運営とあいまって、いわば安定期に入ることとなった。本章では、この時期を中心とする活動のいくつかを紹介したい。

4.1 アイデアの実現

先述のように京都大学では、多数の図書館・室に職員が分散していることなどから、とくに若手職員にとって、京都大学の図書館全体に関わる仕事のアイデアを実現するのは容易ではない。このような状況下において、勉強会をきっかけに若手職員のアイデアが実現できた例として、「レファレンスガイド」と「OPAC への電子ジャーナルリンク表示機能」がある。前者はデータベースなどの案内リーフレットを共同作成し共有するもの、後者は雑誌書誌レコードに対応する電子ジャーナルの URL を表示させるものである。それぞれ、各図書館・室がばらばらに作成していたことや必要な案内がないこと、また増え続ける電子ジャーナルを有効に活用してもらうことなど、共通した問題意識が背景にあった。まず勉強会メンバーから声があがり、勉強会メーリングリスト上で議論したり、時には集まって検討したりしながら、方針やデザイン、実装の方法を詰めていった。その上で上司に提案するなどして、実際の業務に落とし込んでいったのである。なお、これらの取り組みは2005年以前に始まったものであるが、実現した成果はその後ブラッシュアップされたり、形を変えたりしながら、現在でも利用者に提供されている。¹¹⁾これらは勉強会の活動そのものではないとはいえ、その「つながり」を活かしたものである。「つながり」—協働を通じて業務に少しでも影響を与えたという経験は、特に若手職員にインセンティブを与えるという意味で意義深いものであった。

4.2 「つながり」の成果

また、この頃は勉強会の活動がひろがりを見せ始めた時期でもあった。まず、古典籍読解の素養のあるメンバーからの呼びかけで、「くずし字を読む会」が始まった。京都大学では多くの古典籍資料を所蔵しているが、それらを読解できる図書系職員は残念

ながら多くはない。そこでこの会では、初心者を対象に基礎テキストをグループで読解する活動が継続的に行われることとなった。他にも、勉強会メンバーが中心となって行っていた「資料保存ワークショップ」への参加が勉強会を通して募られたこともあった。このワークショップはそもそも破損本の修理技術を共有しようという職員有志の取り組みであったが、その後、京都大学全体の図書館における資料保存を目的とする正式な業務部会へつながることとなった。¹²⁾これらの活動は、勉強会とは別個のものではあるが、こうした活動のひろがりの基盤には、勉強会でのつながりがあったといえる。

さらに、このような図書系職員間のつながりに限らず、図書系職員ではない方との交流も引き続き行われた。例えば、京都大学学術出版会の編集者を講師にお招きしたことは、後に同出版会発行図書を電子化して京都大学学術リポジトリ(KURENAI: Kyoto University Research Information Repository)¹³⁾に掲載するという業務上の連携の端緒となった。

4.3 大学図書館をこえた「つながり」

以上の事例は、おもに京都大学図書系職員間での活動であるが、この勉強会の特徴は先にも紹介したように、広くコミュニケーションをはかることである。例えば、京都大学の若手事務系職員¹⁴⁾を中心とする勉強会「さんすい会」との交流をあげることができる。同じ大学職員でありながら接点が少ないという問題意識もあり、まずは交流を図ることを目的とする合同勉強会を行った。このつながりは、現在でも続いている。こうした交流は学内に限られたものではなく、大阪大学の図書系職員勉強会との合同勉強会なども行われた。また、京都大学の図書系職員には、近隣の国立大学を始め、国立国会図書館などへの出向制度があるが、メンバーが出向先で知り合った職員を勉強会に誘うことは、出向先の人脈を他の勉強会参加者間へ広げる機会ともなった。近年、若手を中心に組織を超えた勉強会がいくつか活動しているが、当時はまだそうした場は少なかったため、人脈形成の場としても貴重な機能を果たしていたといえる。

さらに、出向先の図書館を自らが案内するいわばお出かけ企画や、メンバーがインドネシアへ有志を募って津波被害を受けた文書修復のボランティアに

出かけるなど、外へ出て行く活動も活発に行われるようになった。先に触れた英国図書館ツアーのように、形にこだわらない多様な活動もこの勉強会の特徴をなしているものであろう。

4.4 勉強会情報の発信と蓄積

最後に勉強会情報の発信と蓄積の取り組みについて触れておきたい。参加者が京都大学外に広がるにつれ、当日会場に来られなくても参加できないかという声が聞かれるようになった。これをきっかけに、スキルを持ったメンバーを中心に、勉強会をリアルタイムで中継するというプロジェクトが試みられた。当時は、現在の USTREAM のような仕組みがなかったため、複数のアプリケーションを組み合わせる困難さもあって継続的な取り組みにはならなかったが、次章で述べる勉強会実況の萌芽となるものであった。また、勉強会は当初より Web サイトを持ち、開催案内とともに各回のレジメや感想等を掲載してきている。当初はメンバーが個人的に立ち上げていた Web サーバを利用していましたが、その後、筆者が所属していた工学部電気系の Web サーバの間借りから、無料 Web サービスを利用するという変遷を経ている。Web サイトを管理することは、担当者のスキルアップになることでもあるが、なによりこうして継承してきた過去の勉強会の記録は、今では貴重な資産となっている。こうした蓄積とともに、勉強会という場を次の世代につなげていくことも、幹事としていつも意識していたことであった。

5. ku-librarians の現在とこれから

2008年、勉強会がまもなく100回を迎えようとする頃、すべての幹事(赤澤・天野・江上)が学外へ出向することとなった。これに伴って、林豊氏(現在、国立国会図書館)と大西が幹事を引き継ぎ、2010年から野間口がこれに付け加わった。本章では、2008年から現在までの活動の紹介、およびこれからの活動について述べる。

5.1 コミュニティをつなぐ勉強会

新幹事は当初、10年間も続く勉強会をなくすわけにはいかないというプレッシャーを感じていた。しかし、月1回という開催頻度を崩さずに、これまでの参加者の持ち込み企画に加えて、日常業務に役立つような図書館業務系企画と他大学の図書系職員に

呑海ほか：自主的なキャリアアップの場としての勉強会

も役立つようなトレンド性の高い勉強系企画をバランスよく開催していくことを当面の目標とすることにした。

京都大学に新規採用された職員が発表する新人企画や学外の若手研究者の招待講演、海外研修報告など、毎年開催できるような企画をシリーズ化した。さらに、従来からおこなわれていた Web サイトでの開催記録の公開に加えて、SlideShare での発表資料の公開、Twitter や USTREAM での実況など勉強会自体のプレゼンス向上をはかりながら、京都大学図書系職員以外の方にも来てもらえるような学内外の他のコミュニティとの交流を積極的に推し進めた。

勉強会は立ち上げ当初から京都大学附属図書館内の一室を使用して開催していたが、2008年9月から改修工事に入ったため会場として使用できなくなった。この工事期間を利用して図書館を飛び出し、京都大学大学文書館や京都大学総合博物館といった学内で様々なサービスを提供している施設の協力を得て出張勉強会を開催した。このように、これまで使っていた会場が利用できないという状況をマイナスにとらえるのではなく、プラスに転じることで新たな局面が生まれた。例えば、2009年2月に京都大学学術情報メディアセンターコンテンツ作成室で開催した勉強会がきっかけとなり、後に、附属図書館と学術情報メディアセンターコンテンツ作成室が共同で、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI のロゴと学内広報パンフレットを作成することになった。このように勉強会は図書系職員だけでなく図書館以外の部署に所属する教職員との交流や情報交換の場としてもますます活用されるようになっていく。当然のことながら、大学に所属する図書系職員は、図書系職員であるとともに大学職員でもある。勉強会は、図書系職員以外の人々との交流を通じて、大学職員としてどのようなことを意識して仕事をすすめていけばよいかをあらためて考える機会にもなっている。

一方、将来の MLA 連携¹⁵⁾に向けた交流のひとつとして、京都府立総合資料館の方を講師に招いた勉強会や京都国立近代美術館のバックヤードツアーを開催した。また、京都府内の図書系職員有志による「京都図書館情報学学習会」¹⁶⁾や全国の若手図書系職員らによる「Lifo」¹⁷⁾など学外のコミュニティともコラボレーション企画を行った。

近年は図書館界の内外を問わず様々なコミュニティで勉強会が開催されており、外部のコミュニティと積極的につながりを持ち、そこから異なる視点や人脈を得ることも重要である。しかし、個人でいきなり外部コミュニティに参加することに二の足を踏んでしまう場合もある。このようなコラボレーション企画は各コミュニティの参加者同士の交流を促す効果がある。実際、勉強会参加者のなかにはこれらの企画開催後に他のコミュニティにも参加するようになった人もおり、勉強会が外部コミュニティへの窓のような役割を果たしているといえるだろう。

5.2 勉強会のプレゼンス向上に向けて

2011年4月から、それまで幹事をつとめていた大西と林氏がはずれ、野間口を中心とした7人の幹事グループへと移行した。幹事のはかに「お手伝い」という役割を新たに設けて、Google グループやDropbox といったツールで情報を共有しながら、企画、会場設営、司会進行、懇親会手配、Web サイト、Twitter 実況などを分担して運営を行っている。その試みは概ね成功し、月1回から2回のペースを維持しながら、現在もこれまでに充実した内容の勉強会が開催されている。

2011年6月には、本と人をつなげる参加型しおり「kumori」の活動¹⁸⁾をされている渡辺ゆきの氏(ku-mori)を迎えて、「ku*2mori」という大学図書館と学生とのコラボ・協働を考える勉強会を開催した。「ku*2mori」では幹事グループのひとりである八木澤ちひろ氏(京都大学人文科学研究所図書室)が全国の学生と大学図書館とのコラボレーションの事例をまとめた「学生協働まっぷ」について発表した。この「学生協働まっぷ」は同年9月にWeb版が公開され、さらに11月に開催された図書館総合展のポスターセッションで発表された。単発的な企画で終わるのではなく、収集した事例の発信を重視して積極的に展開していったという点は勉強会でも初めての試みであった。また、事例収集のための調査やWebサイト、ポスターの製作に携わった参加者からは自身のスキルアップにもつながったという声もあがっている。¹⁹⁾

2011年11月には勉強会のプレゼンス向上とコーポレート・アイデンティティ²⁰⁾を狙ってku-librariansのロゴを作成した。ロゴは渡辺氏によるデザインで、カメレオンをモチーフにしたキャラクターが集まっ

て勉強会の楽しく活発な様子を表現している。キャラクター一人一人の色や形を変えることで、ku-librarians が色々な人で構成されていることを表している。またそれぞれのキャラクターには“ku”の“k”と“u”が入っており、キャラクターのしっぽと文字の“librarians”の“b”には、輪が広がっていくことをイメージした模様がついている。



図 ku-librarians ロゴ

ku-librarians はロゴのカメレオンのように幹事や参加者が入れかわりながら12年間続いてきた。なぜ続いているかという問いに答えるのは難しいが、多くの図書系職員が業務に関する理解を深めたり、情報共有や意見交換ができる場を必要としているということは間違いないだろう。勉強会のあり方は今後変化していくかもしれないが、業務を遂行していくなかで疑問に感じたことや課題解決に向けたアイデアなどを気軽に話し合い、共有できる場を提供していきたい。また、学内外の図書館コミュニティとの交流だけでなく、勉強会を通じて大学図書館のメインユーザである研究者や学生を含めた他のコミュニティと交流を深めることも重要である。外部コミュニティへの窓口となり、参加者それぞれの「輪が広がる」ような勉強会を開催していきたい。

6. さいごに

本稿では、大学図書館関係の勉強会であるku-librarians をとりあげ、主として図書館員の自主的な学びという観点からその軌跡をふりかえった。先に述べたように複数の意味で「ゆるやかさ」をもったku-librarians であるが、そのゆるやかさが継続の要因のひとつであるように思う。ゆるやかさ故にそこから得られる「学び」も自主的で、広がりをもったものになる。単なる知識やスキルの習得ではなく、グループの中で意見を述べることで、議論すること、プレゼンテーションすること、考えること、企画すること、調整すること、情報発信すること、メンター・メンティの関係を築くことなどが、キャ

リアアップにつながっていくのではないだろうか。

単体ではその使命を果たすことができないという図書館の特質と同様、図書館員も単体では充分にその力を発揮できない。コミュニケーションを重視し、つながりを大切にする ku-librarians だからこそ、今後も継続するものと期待したい。

注・引用文献

- 1) 「キャリアアップ」には、「仕事に関連するより高い資格や能力、スキルを身につけること」のほかに、「経歴を高めること」などの意味があるが、本稿では前者の意味で使用する。
- 2) 呑海沙織「図書館コミュニティにおける自発的キャリア形成」『情報の科学と技術』59(2), 2009, p.60-64.
- 3) 勉強会としての ku-librarians の記録は、下記で公開されている。〈<http://kulibrarians.g.hatena.ne.jp/>〉。[引用日：2011-12-25]
- 4) 「図書系職員勉強会(仮)」や「京都大学図書系職員勉強会」などと呼ばれることもあるが、京都大学の図書館員が中心になっているものの、勉強会への参加は京都大学内に閉じられたものではないため、本稿ではこの名称を使用しない。
- 5) ここでいう「メンバー」とはメンバーリストに登録している「参加者」を指し、「構成員」を意味するものではない。
- 6) 現在は図書系職員を対象とする研修が整備されつつある。京都大学図書系職員研修ページ。〈<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/kenshu/>〉。[引用日：2011-12-26]
- 7) 部局では、これ以前より行われていた。
- 8) 全学共通科目「情報探索入門」については多くの文献があるが、初期のものとして下記をあげる。
慈道佐代子「全学共通科目『情報探索入門』の試み：図書館の役割について」『大学図書館研究』54, 1998.12, p.43-54.
- 9) 大学図書館問題研究会。〈<http://www.daitoken.com/>〉。
[引用日：2011-12-25]
- 10) マンチェスター大学を基盤とする英国のデータセンター
- 11) 現在、Web 上で公開されている。
京都大学図書館機構。レファレンスガイド〈http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/index.php?content_id=22〉。[引用日：2011-12-25]
- 12) 山崎千恵、天野絵里子「できることから始めてみよう：京都大学の図書館における資料保存活動」『情報の科学と技術』60(2), 2010, p.75-80.
- 13) 京都大学学術情報リポジトリ KURENAI。〈<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/>〉。[引用日：2011-12-26]
- 14) 図書系職員を除く。
- 15) ミュージアム(Museum)・図書館(Library)・文書館(Archives)の連携を意味する。

- 16) 京都図書館情報学学習会。〈<http://kyotolibrarian.web.fc2.com/>〉。[引用日：2011-12-26]
- 17) Lifo。〈<http://www.lifo-club.org/>〉。[引用日：2011-12-26]
- 18) 渡辺ゆきの「参加型のしおり『kumori』：本との出会いを提供する試み」『情報の科学と技術』61(2), 2011, p.76-81.
- 19) 学生協働まっぷ。〈<http://dl.dropbox.com/u/15665405/map/index.htm>〉。[引用日：2011-12-26]
「学生協働まっぷ」は現在でも継続して事例の収集が行われ、日々更新されている。なお、事例の収集は2012年3月末まで、公開は2013年3月末までを予定している。
- 20) 組織の特徴や個性を提示し、共通したイメージで認識されるように働きかけること。

◆図書館学教育研究グループ研究例会案内◆

＜第146回研究例会＞

と き：2012年5月19日(土) 14:30～17:00

ところ：同志社大学新町校地尋真館1階 司書課程資料室(京都市営地下鉄「今出川」駅より西へ、「新町通り」を北へ徒歩3分)

テーマ：司書教諭養成科目の教科書研究ーその4「読書と豊かな人間性」

発表者：平井むつみ氏(滋賀文教短期大学)

概要：「学校図書館をより良くするために何ができるか、学校図書館のあるべき姿を検討する」という趣旨のもとに、それぞれのカリキュラムの内容を検討する4回目の例会である。「読書センター」としての学校図書館の役割を、どのように設定し、それに向けての所蔵するメディアの構成や、それらの具体的な活用をどのようにカリキュラムとしてつくりあげてゆくかが課題とされる科目である。経験の交流を図ることが重要だと思われる。

問合せ先：事務局・柳勝文(anb18968@nifty.com)